京都教育大学 教育資料館 まなびの森ミュージアム
今月の逸品
NO.75 2026.1～2026.3
京都市伏見区深草藤森町1
☎：075-644-8537
✉：manabi@kyokyo-u.ac.jp
MUSEUM OF EDUCATION

「須恵器平瓶」

6世紀　京都府与謝野町出土
（口径6㎝、胴径13.5㎝、高さ11.5㎝）

京都府北部の与謝野町で出土した6世紀（古墳時代後期）の須恵器の平瓶です。須恵器は、4世紀終わりごろ、朝鮮半島から「ろくろ」と「登り窯」の技術を持つ工人が渡来・移住したことで日本に伝来しました。在来の野焼きによる土師器とは異なり、斜面に掘ったトンネル状の穴窯（概ね全長6～8m、深さ1～2mほど）を用いて高温で焼成されることで、酸素供給が抑えられるため粘土中の酸化鉄が還元され、青灰色を帯びることが特徴です。5世紀後半には日本各地に広がり、薄く硬く水漏れしないという利点がある一方、耐熱性に乏しいことから、主に食器や貯蔵具として用いられました。この平瓶については、液体（おそらくお酒）を入れる容器であったと考えられます。

本品の製作には、「風船技法」という方法が用いられています。これは、胴部を成形した後に開口部を円形粘土で塞ぎ、斜め方向に孔を開けて注ぎ口となる頸部を付けるものです。胴部の上半には注ぎ口位置を中心としたカキ目（櫛状の工具で回転を利用して施された文様）が薄くではあるが施され、器面調整（表面の仕上げ）とともに注ぎ口設置の目印としています。なお、胴部の上部中心ではなく、一方に偏った部分に注ぎ口をつけた形状が目を引きますが、これは当時の平瓶の多くに共通する形式です。

では、この平瓶を用いたのは、誰なのか？ 出土遺跡が記録されていないので、残念ながらわかりません。欠けがほぼない完品ですから、古墳の副葬品である可能性があると思います。実のところ丹後半島は、4世紀中頃に200メートル級の前方後円墳がヤマト以外で築かれた、きわめて例外的な地域です。そのため、4～6世紀には朝鮮半島にもつながる日本海ネットワークに支えられた「丹後王国」なる独自の勢力があったとの学説が、歴史学者の門脇禎二氏によって唱えられています。しかしながら、5世紀になると、この地の古墳は急速に小さくなります。くわえて丹波・丹後には部民系の人名や地名が多く残っており、5世紀の丹後地方については、ヤマト王権への従属を強めていたという見方が今では有力です。想像の域を出ませんが、この平瓶が6世紀の古墳から出土したとすれば、その被葬者はヤマト王権に編成された部民管掌者である可能性が高く、本品は、副葬品として彼／彼女に捧げられた物ということになるでしょう。

参考文献
・「須恵器平瓶」（九州国立博物館収蔵品データベース）
https://collection.kyuhaku.jp/advanced/39756.html（2025年12月25日最終閲覧）
・門脇禎二『日本海域の古代史』（東京大学出版会、1986年）
・本庄総子「「丹後王国」の系譜」『地域資源としての湯舟坂2号墳』（京都府立大学文学部歴史学科、2025年）
・吉川真司他『新版県史26 京都府の歴史』（山川出版社、2010年）

執筆者：中村翼（社会科学科准教授）

※附属図書館で展示しています。